

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	廢園の夜：文苑
Author(s)	下林，一之
Citation	龍南會雜誌， 1 5 0： 5 1 - 6 8
Issue date	1913-06-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6222">http://hdl.handle.net/2298/6222</a>
Right	

『貴方はまだムラ氣をもつてゐらつしやるね』  
女はニコツリ笑ひました。

私は腦天をハンマーで打ち碎かれた様でした。急に悲しくなつて、最早此の世に何の望みない様に思はれました。

奥様、これだけの談しなんです。實に馬鹿らしくて小供らしいのでせう。さて其の後私は一度も戀するだらうと思つた事はありません。がしかし、……しかし……あゝ誰か知りませう……

昨日、セース川のブーシバルとアーリーとの間で若い男の死体が浮んだ。誰だらうと身のまわりを探つた漁師は此の手紙を見付け出した。

(五月廿六日晚春の雨肅々たる夜)

## 廢園の夜

人。

庭園に。

老いたる人

旅人

文苑

マルサ (martha)

老いたる人の孫女、

メリー (Mary)

百姓

群衆

家の中に——沈黙の役。

父。母。娘二人。小兒。

柳の生ひたる古き庭園。

脊景には一棟の家。その階下の窓三つに燭火させり。ランプの周圍には、夜の團欒に集まれる家族、窓ごしに可なり明に見ゆ。父は爐邊に座す。母は時を卓の上にのせて空に瞳を凝らす。若き二人の娘は白衣にて、刺繡をなしつゝ、靜なる室に夢みる如く笑みて座せり。小兒は頭を母の左腕にもたせて眠る。彼等が歩み、又は身振りをなす時には、その動作は嚴に、わざたもむろにまたききれに、恰も天國の如く見ゆ。距離と、光線と、透明なる窓硝子の蔽のためなり。

老ひたる人と旅人、あたりに氣を配りて入り来る。

老。家の後にあたる庭園にやつて來ました。誰も此所には參りませぬ。入口は向ふ側にあります。いつも閉めたまゝで、鎧戸も閉ぢてあります。でも此方の側には鎧戸がないから燭が見えます……さうだ、皆ランプをつけたまゝ座つて居ますね。だが私達に氣がつかなくつたのは。母か娘が出て來さうだと思つたが、そ

んな事にでもなつたら大變だつた。

旅。私達はこうしたら宜しいのでせうか。

老。先づ皆家の中に居るかどうか知りたいたのですが。さうだ、父親は爐邊に座つて居る。膝に手をのせて何も爲ないで居る。母親は肘を卓にもたせて……。

旅。私達を見て居ます。

老。いや、何も見ては居ません。眼を据へて居る。私達が見る筈はありません。この大木の蔭になつて居ますからね。だが之より近よつてはいけません。彼所には死んだ女の姉妹が二人居ます。そろそろ刺繡をやつて居ますよ。で小兒は眠て居ます、隅の方の時計は九時をさして居るやうですね。……何も悪い事があつたとも知らずに皆黙つてる。

旅。父親を此方へ向かせて、合圖をしたらどうだらう。頭を此方に向けた。窓を叩いて見ませうか。誰が一番に聞きつけるかわからないが……

老。どうしたがいゝかと迷つて居ます。……兎に角氣をつけてやらねばいけません。父親は歳をとつて病つてゐるし、母親もさうです。——そして娘達はまだほんの小供です。……そして皆、あの女を誰よりも一番愛して居ました。私はこれ程楽しい家庭は他に知りません。……いや、窓の所にゐてになるのではありません。それが一番よくないだらうと思ひます。出来るだけあつさりと、何でもない事の様に話した方がいゝでせう。そして私達は悲し相な風をしてはなりません。さうでないで彼等は私達よりもつと悲しからねばならんと思つて、どうして善いか分りますまい。……庭園の向ふ側に行つて見やうではありませんか。戸を

叩いて、何事も無かつた様に入つて行きませう。で私が最初に入りませう。私を見て彼等は吃驚は致しません私は折々夕方花や果物を持つて行つたり、一所に一二時間話しに行つたりしますから。

旅。なせあなたは私に一所に来てくれとお言ひになるのです。一人でいでなければいゝではありませんか。私は御呼びになるまで待つて居ませう。あの人達は私を見た事ありません。――私はほんの通りかゝりの旅の者で……。

老。一人で行かない方がいゝのです。不幸が獨りの聲で知らせられると、少しも疑の餘地もなくなつてます。情ない様な氣がします。私は道すがらさう思ひました。私が一人で行くと、入つてすぐ話さねばなりません。二言三言いふ中に何もかもさつてしまつて、私はもう云ふ事がなくなりませう、その不幸な事を告げた最後の語の後の沈黙が私は恐ろしいのです。やるせなくなるのはそれからです。一所に行くと私はゆつくり仕事が出来ます。私はこんな風に言ひます「彼れが斯々してるのを見付け出した。あれは流れに浮いて手は握り合せ……」

旅。手は握り合せては居ません兩側に浮いて居たのです。

老。それ御覽なさい。我達の間でもこんなに話し出して、不幸も枝葉の話に蔽はれて了ふでせう。それにもし私が一人で行つたら、きつと一言いふと恐ろしい事になります。そうしたらまあその後はどうでせう。だが私達が一所に行つて交る交る話すと、二人に耳を傾けて、兇報をまともに見つめる事を忘れるでせう。母親が居るといふ事を忘れなざるな。あれの命は糸で吊つた様なものですよ……悲みの波の力が冗言の中に弱まれば結構だが。人々は不幸の周圍に集らして、好きな様に喋言らせるのは一番よろしい。無關係な者

でも知らず識らず悲みを分けて少しづつ持つて行つて終ひますからね。丁度空氣が光の様に、努力も要らず音もなく何處かへ散つて了ひます……

旅。あなたの着物はびつしよりで鋪石の上に油が落ちて居ます。

老。マントの裾が少し水に浸つただけです。あなたこそ寒さうだ。着物は泥だらけで……私は道では少しも氣が付きませんでした。眞暗でしたからね。

旅。私は腰まで水に浸りました。

老。私の來る大分前にた見出しになつたのですか。

旅。ほんの少し前でした。私は町の方に歩いて居ました。時もう晩くて河岸は暗く成りかけて居ました。私は河を見つめながら歩きました、河が道より明るかつたからです。すると一叢の葦の近くに變なものが見えました……ずつと近づくと髪の毛が見えました。髪は頭の周りに圓く擴がつて流のまゝにあちこちと漂つて居ました……

〔室の中にて、若き二人の女は頭を窓の方に向く。〕

老。二人の妹の髪が肩にかゝつて震へてるを見ましたか。

旅。二人共頭を此方に向きました——たゞ頭を向けただけです。あまり聲が高過ぎたのでせう。

〔二女めまたもとの通りに向き直る。〕もうあちらを向きました。……で私は腰まで浸つて、そしてやつとその手を掴んで容易く岸に引き寄せました。あの女はやはり妹達の様に奇麗でした……

老。もつと奇麗だつたと思ひます……何故私はこんなに勇氣が無くなつたのだらう……

旅。何の勇氣の事ですか。人力の及ぶだけはやつたではありませんか。あの女は死んで一時間も経て居ました。

老。あれは朝は生きて居ました。私は教會から出て來るのに會ひましたが、今から出かけるのだと云つて居ました。あの河の向ふ岸に居る祖母さんに會ひに行かうとしてゐるのです。あれは今度何時私と會ふか知らなかつた。……あれは何か私に尋ねやうとして居る様でしたが、思ひ切れない様な風でふつと行つて了ひました。今になつてそれを思ふと——私は其時は何も氣が付かなかつたが。——黙つて居たいと思ふ時や、云つたつて解るまいと思ふ時によく誰も微笑む様に彼れも笑ひました……希望も彼に取つては苦痛の様でした。目はどんよりと曇つて私の方もあまり見なかつた。

旅。あの女は正午ひるかち中、岸を歩き廻つて居たと百姓が云つて居りました。花をさがして居るのだと百姓達は思つて居たのです。死んだのも、もしかすると……

老。誰にも解りませぬ……何が解りませう。彼れは多分思ふ事をよく喋舌りない性質の人だつたと思ひます。そして死にたいと思ふ原因は誰にも一つならずあるものです。あの室の中を見る様に心の中を見る事は出来ませぬ。誰もそんなものです。——人間はつまらない事ばかりしか云はないから誰も何か悪い事があらうとは知らない。あなた方は、もう此世の者でない、魂はもう歸つて來ない様なものと幾月も住んでお出でなさる。あなたは考へもせずにあの女を解釋しやうとなさるのだ。そして出来て了つた事だけを見ておいでだ。人々は生のない人形の様です、そして始終心には何か這入つて居ます。自分でもそれが何だか解らない。あの女はそんな人々が生きて居る様にして生きて居てもよかつたのです。そして死んだ日に「朝の中に雨が降

りませうよ。」とか「私は午飯を食べやうとして居ます。御飯の時は十三人來ませう。」とか「この果物はまだ熟れも居ない。」とか云つたかも知れませぬ。人は散る花を、愉快さうに談りながら、暗い所では泣きます。見なければならぬ筈の事を天の使も見ることが出來ますまい。人には皆事が終らねば何も解りませぬ……昨夜あれは姉妹と一所に燈に照らされて彼所に座つて居ました。そしてもし此事が起らなかつたら彼等をあたり前の事の様に思つて今ご覧になる事もありますまい……私はあの女を始めて見る様な氣がします……何か新しい事が生の中に入つて來て、それから私達は生を了解するものです。それは晝も夜もあなたの側にゐるのだが、あなたには既う永久に分れると云ふ時までは實際見ない。だがまあ珍らしい可愛い心をあの女は持つてたものだ——何といふ可愛さうな、飾り氣のない、底知れぬ心だつたらう。——云はねばならぬ事は云つたし。爲ねばならぬ事は爲たし。

旅。ご覧なさい。室の靜な中に笑つて居ります

老。彼等は少しも心配しては居ません。——あれが今日歸らうとは思つて居ません。

旅。動かずに座つて笑つて居ます。だがあれ、父親は手を唇にあてました……

老。母の胸によつて眠つて居る小供を指して居るので……

旅。母親は目を醒さしてはならんと頭を上げる事をしません。

老。もう刺繡も爲て居りませぬ。室の中は全く小しの音もありませぬ。

旅。彼等は白い絹糸の持を落しました。……

老。小供を見て居ります。……



旅。彼等は誰から見られるとは知りませぬ。

老。私等だつて見られて居て……

旅。皆眼を上げました……

老。でも何も見えますまい。

旅。彼等は楽しさうですね。だがそこには何だか——私には何だか解りませぬが……

老。彼等は危険は決してやつて来ないと思つて居るのです。戸をば閉ぢて窓には鐵の門をかけた。この古家の壁を丈夫にして三つの櫓の戸にも門をかけた。彼等は豫知の出来る物は皆知つたが……

旅。いつかは彼等に知らせねばなりません。誰かやつて来てふどうつかり口を滑らさないとも限りませぬ。

死んだ女をのこして置いた牧場には百姓が澤山居ました——もし其中の一人が来て戸をたゝいたら……

老。マルサとメリーは死体を守つて居ります。百姓等は木の枝で昇床を作つて居りました。私は上の孫に、彼等が出かけたら急いで来て知らせる様に云つて置きました。知らせに来るまで待ちませう。そしてあれも一所につれて行きませう。……私はこんな風に彼等を視る事が出来なかつたらよかつたと思ひます。私は戸を叩いてずっと這入つて簡単に何事も云つて了ふより外、仕方はないと思ひ定めて居りましたが……私は彼等がランプの光の中に居るのを永く見すぎました……

「メリー登場

メリー。祖父さま。皆こちらへ参ります。

老。あれ前か。皆今ここに居る。

メリ。一番手前の坂の下を參ります。

老。皆靜に來るなあ。

メリ。私は低い聲でお祈をする様に申しました。マルサは皆と一所です。

老。人数は多いかい。

メリ。村の者はすつかり棺台の周圍に集つて居ます。燈火を持つて來ましたが私はそれを消させました。

老。どの道を通つて來るのかい。

メリ。小徑から來ます。ゆつくりと動いて參ります。

老。ぢやあもう……

メリ。もうあの人達に知らせになりましたか。お祖父さま。

老。まだ何も云はない事は解つてゐるぢやないか。皆燈の光の中にちつと座つてゐる。ねね、お前、ご覽。生とはどんなものかご覽。

メリ。まあ、靜かさうですね。夢の中にでも見てる様な氣持がします

旅。あれご覽なさい。今二人の姉妹は何にか驚きました

老。立ち上るのだな。

旅。吃度窓に參りますよ。

（この時一人の娘は第一の窓に今一人は第三の窓に來る。そして窓硝子に手を載せて、暗の中を見つめながら立つて居る。

老。眞中の窓には誰も來ないな。

メリ。この人達はじつと外を見て居ます。じつと耳を澄し居ます……

老。姉の方は見ないものを見て笑つてゐる。

旅。妹の目付は驚怖おどろかに満ちて居ます

老。氣をな付けなさい。どの位心が身体に表はれるものかわかるものではありません。

（長き間。メリー老ひたる人の胸に寄り添ひて接唇をなす。

メリ、た祖父さま。

老。泣くのぢやないよ。た前。俺等の順番もやがて來るのだ。〔間。

旅。いつまでも見て居ますね。……

老。可愛さうに。いつまで見て居ても何も見はしませんまい——この夜の暗さだもの。彼等は此方を見て

居ます。だが不幸がやつて來るのは向ふ側からだ。

旅。彼等が此方を見てるのは宜しい。何だか 何だか知らないが牧場の方から近づいて來る様です。

メリ。あの人達でございませう屹度。まだ遠いからよくは見えません。

旅。あの小徑の曲つた所を進んで參ります。——あまた、あの月の光に白い坂を來るのが見えます。

メリ。あれまあ澤山の様でございますね。私がこちらに來ます時でも、町はづれからやつて來る人があり

ました。大廻りをして參りますこと……

老。やつぱり仕舞にはやつて來るよ。私にも見ゆる——牧場を横ぎつて來る——草と見分が付かない位小

さく見わる。小兒が月の光を浴びて遊んでる様だ。あの娘達があれを見たら一体何の事だかわかるまい。好かないからと背を向けても不幸は矢張一足づつに近づいて居る。それでもう二時間も前からぼんやりと見ね出して居る。誰もそれを止める事は出来ない。不幸を持つて来る人達でもそれを止める力はない。不幸はその人々をも自由にする。彼等もどうしても不幸に使はなければならぬ。不幸は行手を定めてそこへそこへと進むのだ。決して疲れず側目も振らぬ。誰でも力を貸さねばならぬ。彼等は氣の毒でも仕方がない、心ならずも近づいて来る。人々の心は憫みで一ぱいだが、でも矢張進まねばならぬ。……

メリ。姉さんは微笑ふのを止めました。お祖父さま。

旅。窓から去つて了ふのです。……

メリ。二人で阿母さんに接唇して居ます……

旅。姉は眼を醒させない様に小供の髪をかき上げて居ます。

メリ。あ、阿父さんも小兒に接唇したがつて居ます……

旅。もう復靜かになりましたね。

メリ。二人は阿母さんの傍に歸りました。

旅。父親は時計の大きな振子をじいつと見つめて居ます……

メリ。あの人達は自分でして居る事が解らないで祈禱して居る様でございます……

旅。自分の心の聲を聴いて居る様に思はれます。〔間〕

メリ。お祖父さま。今晚あの人達に話しますつてはいけません。

老。どうだ。前も勇氣がなくなる様ぢやないか。前前はあの人達を見てはならないのだ。俺は八十三になるが生の本体につつと近づいたのは始めてだ。なせ彼等がこんなに始めての様で嚴に見るのか俺には解らない。彼等はたゞ夜の來るのを待つて居るばかりだ、俺等がやる様にランプの下に座つて待つて居る。だが俺は彼等を高い天國からでも見ても様に思へる。それは彼等のまだ知らない事を俺が知つて居るからだ……ね。さうだらう。なせ前までそんな青い顔をして居るのだ。大方何か言葉で云へないものが他にあつてそれが俺等を泣かせるのだらう。ね。生の中にそんな悲しいものがあるとは知らなかつた。生を見るものにそんな恐怖を感じさせるものとも知らなかつた。だがもし何事も知らなかつたにしたらところで、私は彼等があんなに安らかに座つて居るのを見たら驚いたにちがひない。彼等はここの世の中にあまり信を置き過ぎて居る。彼等は薄べらな硝子を一枚だけで敵とはなれて彼所に座つて居るのだ。それに戸を閉めれば何事も起らないと思つて居るのだ。そして事が起るのば吃度心の中の事だとも、また浮世は戸の外ばかりでないといふ事も知らない。自分達の生は安全だと思つて居る。自分達の生の事を澤山の人達が自分よりよく知つて居るとは夢にも知らない。また俺の様なみすばらしい老人が、戸からいくらも離れない所に居て、丁度傷いた鳥かなんぞの様に彼等の幸福を老いた手に握つて居て、なが／＼思ひきつて手を開けないで居るとも知らない……メリ。可愛さうだと思つて下さい。お祖父さま。

老。俺等は可愛さうだと思ふよ、だが俺等を可愛さうだと思つて呉れるものはない。

メリ。明日に話さないね。祖父さま。明るい時に話さない。明るい時には夜ほど悲しくありますまいよ。老。さうかも知れん。さうだらう……何でも夜の中にうつちやつといった方が或はよからう。そして日光は悲

哀に對して優しいものだ。……だが彼等は明日俺等に何と云ふだらう。不幸は人を猜忌にする。不幸を蒙つた人は局外者より早く知りたがるものだ——彼等は不幸を知らぬ人々に委託して置く事を好まぬ。俺等は何が彼等から奪ひ取つた様に思はれるだらう。

旅。それにもうあまり晩うございます。祈禱のつぶやきが聞えて參ります。

マリ。もう皆參りました——生垣の向ふを通つて居ります。

〔マルサ登場。〕

マル。今參りました。私は皆をこゝへ案内して參りました——道に待たせてございます。「子供等の泣聲。聞ゆ」あれ、子供達はまだ泣いて居る。來てはいけないと云つたのに、私達も見たいからと云つて聞かないのだもの。一寸さう言つて來ませう——いゝねもう泣き止んだ。もうすつかり用意はいゝのですか。私はあの方の上に載つて居た小さい花輪を持つて來ました。あの小兒にと思つてあの果物も持つて來ました。私は休まうと思つてあの方を棺台の上に横たへておきました。全然眠つてる様に見えます。あの方の髪には困りました——どうしてもよく整はないのです。私は雛菊を集めました——他の花がなかつたから仕方ありません。あなた方は此所で何を爲ていらつしやるの。なせ彼所にあの人達と一所に居らつしやらない。「窓の中を視る。」あの人達は泣いて居ない。あの人達は——まだ話して無いのですね。

老。マルサ。マルサ。お前の心にはあまり生氣がありません。お前には解らないのだ、一体……

マル。私にはなせ解らないの。「暫らくの沈黙の後、嚴に責むるが如く」こんな事をなすつてはならなかつたのに。お祖父様……

老。マルサ。お前は知らないのだ、あの……

マル。私は行つてさう云ひます。

老。まあお前、待つて居なさい。一寸待つて居なさい。

マル。まあ、可愛さうに。もう暫くも後らしてはなりません。

老。なせいけない。

マル。私は知りません。でもそんな事が出来るのですか。

老。此所へたいで、マルサ。……

マル。よくまあちつと辛棒して待つて居るのね。

老。此所へたいでといふのに……

マル。「振り返りて」どこにいらつしやるの。お祖父さま。私は氣が障いで、あなたが見けません。私は一体どうしたらいいのでせう……

老。もう彼所を見てはいけない。事の仕末を云つて終ふまでは……

マル。私は一所に行きたうございます……

老。いや、マルサ、此所に居なさい。家の壁の方に向ひて居るこの石の腰掛に、メリーと一所に座つて、少しも見ないで居るのだ。お前はまだまだあまり幼いから、見たら一生忘れられまい。「死」が眼に影つた時にはどんな顔をするかお前達は知つてはならぬ。或は彼等もわつと泣きだすかもしれない……が、お前達は其方を向いてはならぬ。或は何の音もないかもしれない。もし何の音もしなかつたら、それこそそんな事が有つても

振り返つて見てはならぬ。悲がどんな風に表はれて来るか誰にも前から解るものではない。心の底から絞り出したほんの暫くの微かなすゝり泣き、大抵はそれで終ひだ。俺はそのすゝり泣きを聞いた時にどうしたらいいのか自分で解らない……その聲はこの世の物ではない。た前、行く前に接唇して呉れ。

〔祈禱のつぶやき漸く近づく。群衆の一部庭園の中に進み来る。音せぬ様にと歩む足の響、耳語の響。旅。〕〔群衆に〕こゝで止つてくれ。窓の近くに行つてはいかん。あの女はどうした。

農夫。誰の事だ。

旅。他の者——擔夫だ。

農。彼等は戸の方に通つてゐる本道を來るよ。

〔老ひたる人退場。マルサとメリーとは窓に脊を向けてベンチに腰を掛ける。低き群衆のつぶやき聞こゆ。旅。しつ。話をしてはいけない。〕

〔室の内にて丈高き方の少女、立ち上りて戸の處に行き門をぬく。〕

マル。戸を開いてゐるでせう。

旅。まるで違ひます。なほ固く閉めて居ます。〔間。〕

マル。た祖父様は未だ入つて行きませんね。

旅。さうです。又母親の側に座ります。他の者は動かないで、小供はまだ眠つて居ます。〔間。〕

マル。私の可愛い妹。手を借して。

メリー。姉さま。〔抱擁して互に接唇す。〕



旅。戸を叩きなすつたに違ない——皆同時に頭をもち上げた——た互に顔を見合つてゐる。

マル。あゝ。私の可愛い妹。私はもう泣き出しさうだ。「妹の肩に顔を埋めて歎歎をかみしむ。

旅。吃度復叩いてないでなさるのだ。父親は時計を見て居ますよ。立ち上つた……

マル。た前。た前。私も行かなくちや——あの人達ばかり置いてはいけない。

メリ。た姉さま。た姉さま。（脊を抑へて留む。

旅。父親は戸の所に行つた。——門を抜いて——注意深く戸を開けました。

マル。あゝ、あなたまだ見ねませんか、あの……

旅。之。

マル。あの擔夫は……

旅。戸はほんの少し開いただけです。芝生の隅と泉が見るだけです。彼は手を戸にかけたまゝで——一足退いて——「あゝ、あなたでしたか。」とでも云つてゐるやうです。兩腕を上げました。そしてまた戸を靜かに閉めました。た祖父さまは室に入りました。……

〔群集は窓までたしよせる。マルサとメリーとは半立ち上り、やがて共に立ち上りて、ひたと互に寄り添ひつゝ、人々に従ひて窓の方に行く。老いたる人、室の中に進み行くのが見ゆ。二人の姉妹は立ち上り、母も起きて、小兒を肘掛椅子によき様に寝かしてそこを離れる。小兒は室の中央に、頭を少し前にかしげて眠れる様戶外より見ゆ。母は老いたる人に會はんと進み出で、彼に手を指し出す。されど彼が手を握る間もなき前に再び引きこめる。一方の少女、訪問者のマントを脱がせむとす。今一人は彼に肘掛椅子を進む。されど

老いたる人は輕き身振にて辭退す。父は驚きたる様に微笑す。老いたる人は眼を窓の方に向く。

旅。思ひ切つて云へないと見ゆるな。私達の方を見ていらつしやる。「群衆のつぶやき。しつ。

「老いたる人は、窓に顔〔複數〕のぞけるを見てつと眼をそらす。一方の少女がまだ椅子を薦める故、遂に之に腰を下し、幾度も右手を顔にあつ。

旅。腰をかけた。

「室内に居るもの皆腰を下す。此間父はしきりと何事をか話し居るものゝ如し。老いたる人遂に口を開く。その聲の調子は、この人々は注意をひくものゝ如し。されど父は言葉をはさむ。老いたる人再び話し出す。その話を了解するにつれて刻一刻と人々緊張し來る、突然、母、驚きて起つ。

旅。母親には解り出したやうだ。

「彼女は向ふを向きて手に顔を埋む。再び群衆のつぶやき聞ゆ、彼等は互に肘にて突きあふ。小兒等も見たいからさし上げて呉れよと泣く。母親達は多くその通りにしてやる。

旅。しつ。まだ話したのぢやない。

「母は氣遣しげに老人に何事をか問ふ様。老人また何事をかいふ。それより不意に残りの者も皆立ち上りて彼に質問す。さて彼は徐に首を縦に振る。

旅。あゝもう話した。不意に云つて終つたのだ。群衆の聲。あれだちに云つたのだ。云つたのだ。旅。私には何も聞けない……

「老いたる人も亦起ち上りて、振り返らずに其のまゝ、後の方なる戸を指す。父も母も二人の少女も急ぎ戸の方に走る。その戸を父は開かんとすれど容易に開かず。老いたる人は出で行かんとする母を止めむとす。群衆の聲。皆出て行く。皆出て行く。」

「庭園の中の群衆騒ぎ立つ。皆家の向側に急ぎて去る。たゞ旅人のみ窓の際に残る。家の中には、折り戸は遂にぱつと廣く開きて、皆一時に出で行く。そこより星しげき空と、月光に照らされし芝布と泉と見ゆ。一方、室の中央に残されし小兒は、肘掛椅子にすやすやと眠る。〔間〕」

小供はまだ眼が醒めないな。〔彼も出で去る。〕（終）  
この一篇は Maeterlinck の *Interieur* を譯せんと試みたるものなり。

## 美

## 鳥

一、乙 若 葉 美 鳥

「K君は死んだつてね」

友達 of B が私の家に蒼くなつて來たのは、小糠雪ちろくめく冬らしい夕暮であつた。其の宵は二人してKの事に就て種々と話し耽つた。そして其の終りは、若くして死んだ熱情詩人を悲しむといふのであつた。

私は今Kから來た手紙を書いて見やう。——それは若いKの眼に影じ心に伸びた不思議な想像と憧憬の翼であつて且つ彼れの死因を語るに充分であるから——。